

令和三年十一月吉日初版作成

選択と注目に従って

意のままに動く本心の働き

高嶋 善三郎

目次

- 本心と肉体の心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 本心と一つになれる時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 人間神の子観の生き方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 宇宙子科学的に解明された祈りの大切さ・・・・・・・・・・ 6
- 選択と注目に従って意のままに動く本心の働き・・・・・・・・ 7

(註)「宇宙子科学的に解明された祈りの大切さ」の項目で記載した内容は、宇宙子科学資料『宇宙子科学とは(初版)』(2019年相原誠二郎講師編集作成)から引用させていただきます。

お願い

既に作成した資料(バックナンバー)は、ウェイブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、「感想があれば、お聞かせください」。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

(スマホ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

本心と肉体の心

UJUN

五井先生作

UJUNYO UJUNYO UJUNYO

まじりのUJUNYO UJUNYO

探し求めて 幾転生

私はUJUNYOの在り場所を

はじめて しっかり知りました

UJUNYOは天にありました

いのちの中にありました

光の中にありました

私の中にありました

UJUNYOは私にありました

UJUNYOはいのちにありました

UJUNYOは光であります

人と人をましまろく

天と地（つち）をまっすべし

つなぐ光の波でした

UJUNYOで言われているUJUNYOとは、宇宙神とつながっている、内なる神とも言われている本心のことです、神性そのものです。

私たちがこの肉体世界で一般的に言っている心は、肉体の心、即ち神霊のひびきを忘れてしまつて、肉体だけを別に離して考え、眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心です。前者が神の子としての自分即ち大我の光（真我）に対して、後者は小我の想念ともいうべきものです。

本心について『愛する心とUJUNYO』の「生命と心について」の項目から整理してみましょう。

(1) 肉体人間の脳天(第七のチャクラ)は肉体以外の体、つまり幽、霊、神と仮に呼んでいえる各階層の体につながっている場であるが、

神霊の階層の心の波動が、そのまま素直に肉体の脳天に伝わってき
ている心を本心と呼びたい。

(2) 本心は自分の頭の中や、心臓の辺にあるのではなく、神のみ心
と一つの心にもある。

(3) 本心は神そのものの心であり、永遠の生命そのものの心である。

(4) 生命と本心とは、共に、宇宙神のみ心の中に生まれているが、
生命は大自然の根源の働きそのものであり、本心はその根源の働き
をその智慧能力で、大調和達成のために生かすきってゆく働きをし
ている。

(5) 本心は、意識したり分別したり、不安混乱したり、ああではな
い、こうではない、とゆれ動く心(業想念波動)ではない。

(6) 肉体人間の脳天(第七のチャクラ)が神界以外の階層即ち幽界
から伝わってきている波動に蔽われてしまうと、神霊の心そのまま
の働きはできなくなる。そのような時業想念で本心を求めても、本
心を自らのものとしてつかむことはできない。業想念波動を消滅
し、空(うつろ)になったところから、本心は現れてくるのである。

本心と一つになれな時代

これまで幾転生、私たちは、本心と一つになれなかったのは、肉体生
活をして行くうちに、本心があることを見失った、忘れてしまったから
と言われています。思い出すが、なぜ難しかったのでしょうか。

五井先生は『真の幸福』においてその難しさについて言及されていま
す。「今日までは、自分たちの欠点を直してからでなければダメであつ
たり、清らかな心境になっていなければ、神に祈れぬということになっ
ていて、神様に近づくのがなかなか難しかったのである。自分の欠点を
直して身体の、浄まってから神様に祈るのでは、大半の人が神様に近づ
くことはできない。」と。

当時、地球自体の波動の次元が低かった、言い換えれば、地球自体が
地球人類の誤てる想念に厚く覆われていたからともいえます。

そのような時代に、五井先生は、直霊と合体され、神界と肉体界をつ
なく光の柱となられ、真理と大調和の光(救世の大光明)を降ろされ、
夜明観音の働き(「自身のお言葉」)を担って、人類滅亡の危機を幾たび
も乗り越えさせ、今日まで私たちを導いてくださったのです。

その中で、20003年から20009年にかけて昌美先生の指導の「宇

宙究極の一筋の光を降ろす「神事」を行い続けることにより、私たち会員全員の叡智のチャクラ（第六チャクラ）は正しく開かれ、2012年七月の大事業の大成就を果たした結果、これから生じる大災害（政治経済の低迷、宗教対立、民族紛争、疫病、原爆、テロなどあらゆる人智、あくなき欲望にて作り出してきた大カルマによるを救いうる神力が整ったという秘神示がありました。さらに2014年一月の新年祝賀祭において、「宇宙神の根源に汝らの魂は直結した」という「神示が島美先生を通して降ろされました。

そして2015年に「豊かで調和した世界を協力して築いていく」という、個人と団体が立ち上げた国際的ネットワーク、「富士宣言」が立ち上げられ、2017年七月に神性復活の印が会員に降ろされました。

現在は、世界の人々の目覚めの朝を迎えたところです。

2012年十二月を境に一段と地球を取り巻く波動は高まり、二万6000年ごとに訪れる次元上昇の時代に突入したと言われています。

これまで五井先生が教えてくださったみ教え、世界平和の祈りや印の効力が発揮される時を迎えているのです。

人間神の子観の生き方

ここで、五井先生の最も中核的な教えである、「消えてゆく姿で世界平和の祈り」について考えてみましょう。

この教えは、人間神の子観の生き方を示されているのです。

「一度、肉体人間そのものさえも、全否定しきっている。しかし、それを大げさに、肉体無し、などとは説かず、只何気ない言葉として消えてゆく姿を使い、あらゆる肉体世界の想念や出来事を、その消えてゆく姿という想いに乗せて、神の世界、神のみ心である、大光明の中、完全性の中、そして各個人に内在する本心の中に融合させてしまう習慣」なのです。では、どのように融合させていけばよいのでしょうか。

『靈性の開発』(99ページ)において、その疑問に対するコメントがあります。結論から言えば、

五井先生は、肉体だけを別に離して考え、神靈のひびきを忘れてしまった肉体の心は、再び神のみ心に入り込んでしまえば、即ち神の理念の現われの方に想いをむければ、そのまま、いつの間にか消え去ってしまい、神靈のひびきと一体となった肉体の心にならなくなってしまうのです。

その言及されている箇所は次のとおりです。

五井先生は、ここでは、本心を大霊（神）と、神の心を忘れた肉体の心を業（カルマ）という言葉に言い換え、解説されています。

「大霊（神）はすべての力の根源であって、すべてを一つに結び調和そのものであるのに、その大調和の姿がそこに現われようとして、業想念の壊滅をひき起こしているのに、そうした神の理念の現われの方に想いをむけずに業（カルマ）の方に想いをむけるから、不平不満や、恐怖や恨みが起こる。不平不満の想念の人には不平不満の事柄がかえってき、恨みを持つ人には、恨みの想いがかえってくる、自分が出したものはすべて自分にかえってくる、というのが、業（カルマ）の法則なのである。この業（カルマ）というのは、神がなくて現れたものではなく、間接的にはやはり、神の力によって動かされているのであるから、神がその必要を認めない時には、崩れ去る。」

業（カルマ）の波動は、神のみ心のひびきでも、実在の波動でもなく、人類が神のみ心を離れて独り立ちしようとした時から巻き起こされた波動なので、人類が再び神のみ心に入り込んでしまえば、そのまま、いつの間にか消え去ってしまうものなのです。業の波動は、実在の波動と対立するものではないと解説されているのです。

また神を離れた誤る想念というのは、本当は神様のひびきを現わすための肉体なのに、その神霊のひびきを忘れてしまって、肉体だけを別に離して考えるから、そこにある生命はだんだん枯渇してゆく。生命エネルギーがなくなって来る。やがては滅びるという事になる。それは天変地変で滅びるか、戦争で滅びるか、どちらにしても生命エネルギーがなくなってくるから、枯れてしまう。しかし本心の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、すべてが調和していくと言われているのです。

宇宙子科学的に説明された祈りの大切さ

神様の方に想いを向けて置く生活がいかに大事かということ、宇宙子科学的に説明されています。

宇宙子科学は、五井先生が、世界平和の祈りの大切な事を唯物論の人たちにも理解できるように、宇宙の科学者の力を借りて宇宙の根源の在り方を説明し、この肉体界に降ろされたものです。

「この世はすべて波動で成り立っているので、精神波動と物質波動の

調和によってこの世は完成してゆく。精神波動にしても物質波動にしても、常に新陳代謝しているのです。古い波動を排えつつつけていては、新しい波動の巡ってへるのを邪魔してしまふことになる。その新しい波動といふのはどこから生まれてくるのかというと、宇宙神のみ心から生まれつつへるのである。

その最初の波動を出すところを、宇宙子科学では宇宙核といい、その波動の最小単位を宇宙子と呼んでいる。

精神波動にしても物質波動にしても、古くなると、汚れてきて、本来の働きができなくなる。それは、細胞が古くなるから、老衰現象が起こる、地球科学の細胞の説明と全く同じで、精神波動でも宇宙核の中から絶えず、宇宙子の補給を受けていないと、精神波動が汚れてきて、是非判断ができなくなる。そして人類への迷惑にも気づかず、原水爆実験をつづけてゆくようなことになってゆく。

理性が曇るのも、直感が鈍るのも、すべて、宇宙子波動の新陳代謝がうまくできていないからである。そこで、常にその新陳代謝をつまぐやるように、人間の想念はいつでも宇宙核（神様）の方に向けておくことが大事なのである。『白光誌1963年5月号』

選択と注目に従って意のままに動く本心の働き

前項に言及されている、新しい波動の巡ってへるのを邪魔してしまふ古い波動を排えつつつけている想念行為は、どういふものなのでしょうか。そのヒントになる言葉が、『フンネスの青写真 私は聖シャーマンなるものである』111ページ（アシェイマリ・マクナマラ著）においても次のように解説されています。ここでは、本心を内側の静寂、あるいは内なる源と言い換えられ、邪魔する想念行為を二つ指摘し、その解決へのヒントが示されています。その要点を整理しますと、

第一に肉体の心は、目の前の混乱に出会うと、瞬時に情報を取り込んで、それを理解しようとして細かく分析し、苦痛を生み出すものを探し求め、そしてさらなる問題という新天地にあなたを連れていき、それらの問題をさらに理解しようとして捜し求めつつつけてしまふ。

第二に、自分に接している人たちの、自分に対する個人的見解に把握れ、それに振り回される。幼児は、人にごう思われようと気にしない。自分のことを人に認めてもらう必要もない。しかし大人になったあなたは、（なんの先入観もないため）他人の個人的見解に基づいた、あなた

への観方を認める。しかしそれは、他人の見解にエネルギーを与えたことになり、その観方に把われ、(お互いが神性に目覚めている時は別として)何かにつけ自他を責め、裁いてしまう。あなた方の多くの人はいまだに夫あるいは妻、友人、マスメディア、他人に(自分が肉体人間だと)証明させることを許している。

そして、これらの想念行為を手放す方法として、その原因を示し、次のように解説されています。

このようになったのは、肉体の心の働きであるが、そのもとは、すべて内側の静寂(本心)からくるエネルギーであり、エネルギーはあなたの選択と注目に従って意のままに動くことを忘れてしまっているからだ。この真理を理解し、世界中のガイドや導師のサポートを得て、他人の自分に対する意見を手放し、内なる源本心にあなたを導かせる時、あなたの内なる源の波動があなたの外に現れ、あなたの周りのエネルギーは驚くほどシフトする。

人生は実り多いものとなり、必要なすべてのことが、たやすくと流れと恩寵と共に現われてくる。

五井先生流に言えば、生命の本源の世界につながっている自分(本心)

を知り自覚し、肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分(肉体の心)と区別して、本心(内なる神様)の方に想いを向けてゆくことは、本心に自分を導かせる。即ち神にすべてを全託するということになるのです。誤てる想念(カルマ)は、すべて光の中に消えてゆき、人生は驚くほど愛に包まれ、己自身の、これまで発揮できなかった能力や素質が自然と現われ、喜びと愛に包まれた人生となって来る。そして自分の選択と注目に従って意のままに即ち自由自在に動いていた神性を思い出し、この肉体界に身を置きながら、己の神性を顕現するのです。

『真の幸福』の中で、五井先生は次のように言われています。

「人間各個人は、神の分け生命として、大宇宙のあらゆる立場を経験として知り、次々と神の中心の立場に近づいてゆくのだ、ということの偉大さは、その事実を想っただけで、心が広々としてくるのである。只単に、この地球界の物質世界における幸、不幸だけに把われて一喜一憂していることは馬鹿らしいことで、じっと心を静めて、大神様のみ心の中をみつめてみる必要がある。そのみつめる方法がいのりなのである。」

この言葉を実感として受け止められるようになった時、私たちは人神の子の真髓を体得したということになるのでしょう。